

平成31年3月25日 第60号

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



ひ 火 「あとを継ぐ」

み 「この店も私でおわりです」と淋しそうに語った。二人も息子がいるのに、家業を嫌う埋 っ出てしまったという。

三代も続いた店だけに随分と説得したが無駄だった。と嘆く親御さんの気持ちはよく解る。「私の店の物は細かくて、利幅が少ない」と、寺へ来るたびに老僧にぼやいていた人のあとを継いだ二代目の当主には三人の息子があなが、長男が継ぐことになった。

次男も三男も兄が継がなければ僕が、というので子供達に相談させた結果、そう「なった」そうである。

職業はどれも尊いことは、年を経て解ること、若者はともすると見かけの派手なものに憧れる。この家の職業は地味と先代はこぼしていたのに、三人とも揃って継ぎたいとは、私は不審に思って当主に尋ねた。

「どんな職業にも良いことばかりありません。愚痴の出ることもありませう。私の家では子供ができた時に、家内と固く約束しました。子供の前では決して仕事の愚痴は言わない。逆にやり甲斐のあること、この仕事の有難いことを話そうと。今でもこれを守っています」と答えてくれた。十数年間も両親の愚痴を聞いて育った家の仕事はつまらないと教え込まれて育った。その子が成人して「ハイ」と継ぐわけはない。家業を手伝っているその長男の姿をみて、この家はいつまでも栄え続けるだろうと思った。

一般的な考え方（武末十治男）

些細な事でも真心のこもった接し方をすればこの店は気持ちの良い親切な店だと評判になる事でしょう。何事も人に対しては真心をもって接すれば幸は自分に返って来ると思いますが、店に限らず「真心と親切」は、いつまでも持ち続けたいものです。